

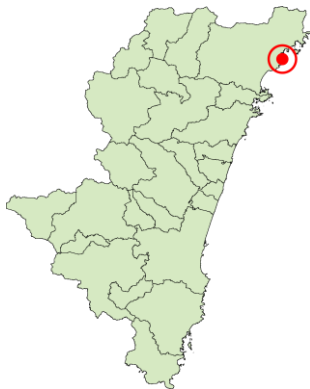
# ウニ除去を中心とした藻場の再生

南浦藻場保全会

## 南浦地区について

南浦地区は、宮崎県北部にある延岡市の西側に位置し、日向灘に面する。海岸線は、複雑に入り組むリアス式で、自然豊かな場所である。

地区の漁業は、定置網や刺網、魚類養殖のほか、ヒジキやウニなどの採介藻やアワビ養殖なども営まれている。



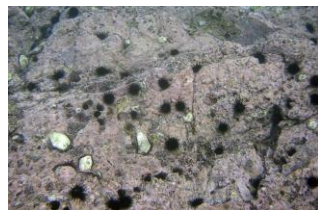
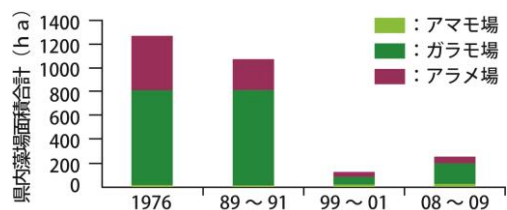
## 藻場の現況

当地区の沿岸には、かつてホンダワラ類やクロメなどの大型海藻で構成された藻場が広がっていた。また、そこで育つヒジキやトサカノリ、フノリ、さらに藻場に生息するアワビやトコブシは、当地区の漁業を支える重要な資源であった。

しかし、平成初頭より藻場の減少が認められ、平成20年頃には一部海域を除き、藻場が消滅する事態となった。また、それに応じて、アワビやヒジキなどの採介藻類の漁獲量が減少し、漁家の経営が不安定化した。

宮崎県によると、大規模な藻場の衰退は、植食性魚類の過剰な採食が主な要因の一つと考えられている。また、その後の磯焼けの継続は、植食性魚類に加えて、ウニ類による食害が大きく影響していると報告している。

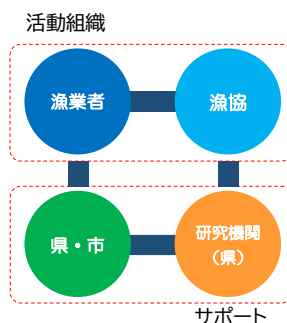
藻場の衰退は、地区の漁業にとって重要な採介藻資源だけでなく、それを産卵・育成場とする多様な水産資源の再生産にも悪影響を及ぼすことから、その回復に向けた対策が喫緊の課題となっている。



## 組織の設立および活動方針

上記の課題から、当地区の漁業者が中心となり、平成22年度に「南浦藻場保全会」を設立し、藻場の回復に向けた取組を開始した。

組織体制は、右図のとおりである。また、活動方針は、魚類の食害対策が技術開発の途上にあることから、ウニ類の食害対策を中心とした取組で藻場の回復を図ることとした。

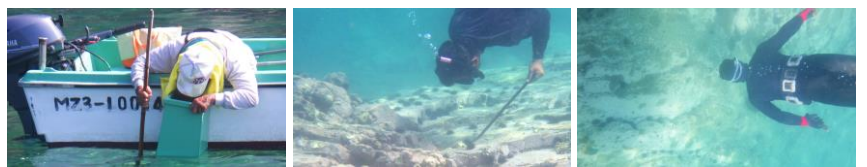


<b>① ウニ類の除去</b>
藻場の再生エリア4箇所において、生息密度の高いウニ類を除去し、小型海藻類や大型海藻類の繁茂を促す。
<b>② 保護区の設定 (ウニハードルの設置)</b>
再生エリアの4箇所のうち、かつて広範に藻場が形成されていた箇所に、ウニ類の侵入防止施設(ウニハードル)を設置し、海藻類の繁茂を促す。
<b>③ 母藻の設置</b>
大型海藻類の種の供給量が磯焼けで不足している。そこで、現存するホンダワラ類を対象に母藻の設置を上記の保護区で行い、藻場の回復を促す。

## ウニを除去し、その侵入を防ぎ、種をまく

### (1) ウニ類の除去

ウニ類の除去は、主に8月に実施する。活動場所は、4箇所の藻場再生エリア内である。また、状況に応じて任意の範囲を設定し、重点的に除去を行う年もある。除去作業は、自作のウニ潰し棒やハンマーを用いて、船上や素潜り等でウニを潰す。ここ3年は、ウニを年間23千~28千個除去している。



### (2) 保護区の設定 (ウニハードルの設置)

かつて広範に藻場が形成されていた再生エリアの2箇所に、ウニの侵入防止を図る「ウニハードル」を設置する。ウニハードルの仕様や設置方法は、下図のとおりである。網の設置期間は周年で、随時補修しながら取組を進める。なお、令和元年以降は、強い冬季波浪の影響で網が流失し、回収できなくなったことから、活動を控えている。



### (3) 母藻の設置

藻場の回復が遅れている再生エリアに、母藻を設置し、種の供給不足を改善する。活用する母藻は、ホンダワラ類で、現存藻場から石ごと採取した藻体を利用する。設置時期は3月。方法は、石ごと採取した藻体を、そのまま網袋に入れ、設置する。



## 活動の成果と課題

活動当初、再生エリアは磯焼けで、小型海藻すら確認できなかった。そこで、ウニ類の除去を中心とした取組を長年実施してきた。その結果、現在、大型海藻や小型海藻群落が形成されるようになり、活動の効果が目に見えるようになった。

一方で、依然としてウニの密度が高く、藻場の形成が阻害されている場所がある。今後も、ウニ類の除去を中心とした取組を継続し、確実な藻場の回復とその安定化を図っていきたい。また、アワビ等の餌となるクロメやカジメ群落の保全や、未だ取り組めていない植食性魚類への対策の検討も進めたいと思う。

